◆二四〇　さじき女房御返事　建治元年五十四歳御作

与印東三郎左衛門祐信女房　一二三一Ｐ

女人は水のごとし　うつは物にしたがう　女人は矢のごとし　弓につがはさる　女人はふねのごとし　かぢのまかするによるべし、しかるに女人はをとこ　ぬす人なれば女人ぬす人となる　をとこ王なれぼ女人きさきとなる　をとこ善人なれば女人　仏になる、　今生のみならず後生も　をとこによるなり、しかるに兵衛のさゑもんどのは法華経の行者なり、たとひ　いかなる事ありとも　をとこのめなれば法華経の女人とこそ仏は　しろしめされて供らんに　又我とこころををこして法華経の御ために御かたびらをくりたびて候。

法華経の行者に二人あり　聖人は皮をはいで文字をうつす　凡夫は　ただ　ひとつきて候かたびら　などを法華経の行者に供養すれば皮をはぐうちに仏をさめさせ給うなり、此の人のかたびらは法華経の六万九千三百八十四の文字の仏にまいらせさせ給いぬれば　六万九千三百人十四のかたびらなり、又六万九千三百八十四の仏　一一　六万九千三百八十四の文字なれば　此のかたびらも又かくのごとし、たとへばはるの野の千里ばかりに　くさのみちて候はんに　すこしの豆ばかりの火を　くさ　ひとつにはなちたれば一時に無量無辺の火となる、此のかたびらも又かくのごとし、ひとつのかたびら　なれども法華経の一切の文字の仏にたてまつるべ

し。

この功徳は父母　祖父母　乃至無辺の衆生にも　をよぼしてん、ましてわが　いとをしと　をもふ　をとこは申すに及ばずと、おぼしめすべし、おぼしめすべし。

日蓮

五月二十五日

花押

さじき女房御返事